

博物館におけるハーバリウムについての一考察

A Study on the Herbaria in Museum

井 上 賢 治

Kenji INOUE

1. はじめに

日本の植物学研究は本草学時代からはじまり、明治維新以後、多くの研究者により近代的な分類学が進められ、今日では、多くの図鑑類が出版されている。日本の植物誌の概観が分類学者により、ようやく解明されつつあり、これに伴い、膨大な植物標本が大学のハーバリウムを中心に集積された。その結果、植物誌研究から種属誌研究へと進展した分類学はさらに系統分類学へと発展したが、今後研究されなければならない多くの主題を残している。また一方では、分類学発展の陰で、日本における高等植物の分布様式の解明は置去にされている、地域植物誌も編纂されているが、科学文献として再現性の確保されているものは比較的少ないように考えられる。植物分類学及びフロラ研究は今後さらに、調査・研究されなければならない分野であり、この分野の研究者の養成をも含めて、博物館で担うべき役割は大きいと考えられる。

そこで、本論文においては博物館ハーバリウムについて十分に論議されていない、いくつかの点について考察を試みた。

2. ハーバリウムの研究分野

博物館は標本を媒体とした教育・研究をする施設であるので、分類学はまさに適した分野であろう。しかしながら、日本において分類学的研究のための標本が十分に

集積されている博物館は驚くほど少ない。大学のハーバリウムと比較すると明らかである(表-1.)。充実したハーバリウムを持つ博物館は国立科学博物館と大阪市立自然史博物館のみであろう。今後、おしは標本の集積を積極的に行うべきか否かについては、分類学的研究か、地域社会の自然に関する情報センターになるような機能をもつこと、即ち社会奉仕か(小菅 他 1970)という問題もクローズアップしてくる。この問題は相反するものとして扱われ、どちらをとるべきであるかという議

表-1 日本のハーバリウムにおける植物標本保有量

標 本 量	大 学	博 物 館
200 万以上	1	
100	1	
50	2	1
25	2	
10	8	1
5	7	1
1	30	5

* いのうえ けんじ

東京農業大学図書館標本部

Museum, Tokyo University of Agriculture

東京都世田谷区桜丘1-1-1

原稿受理：1982年12月20日

連絡先(勤)

東京農業大学図書館標本部

(電) 03-420-2131 (内線459)

論もなされてきた(小菅 他 1970)。柴田がいうように、社会奉仕を考えれば生態学研究の充実を図らねばならないであろうが、そう簡単なことではない。生態学が分類学の基盤の上に発達してきたことを考えれば、両者が併行して発展してゆくことが望ましい。具体的には、種が多様であるために、その一部である少数の標本からでは種を認識することは困難で、図鑑によるだけでは正確な同定すらおぼつかない。そして、種を認識できなければ、植生調査をすることすら不可能であるし、いわゆる社会奉仕の内容すら保証できなくなってしまう。こうしたことから、自然史教育は博物館の一目的であるが、教育施設としての資質を博物館自身が向上させることは、さらに重要な課題であり、植物分類学研究の必然性が考えられる。

分類学は系統分類学への発展により、核形分析、発生様式、花粉形態、成分分析などからの系統の追求がおこなわれており、膨大なおしば標本を積みあげておこなわなくてもできるようになってきた(従来の基礎的な研究の手法を否定するものではない)。系統分類学においては、すべての館でヨーロッパの主要な博物館ハーバリウムのような大規模なものも必ずしも必要ではないかもしれない。ある程度の標本集積量があれば、日本の博物館においても分類学的研究は可能であると考えられる。

近年、各地域のフロラ・植生などの調査も進んでいるが、博物館が主導的立場で実施したものは比較的少ないようである。フロラの研究は種の分布様式を知るうえで基礎的な研究であり、地域社会の自然史資料となる。

3. ハーバリウムの学芸員について

(1) 学芸員の専門性

標本の収集・整理・保管に責任のもてる学芸員が博物館に必要なことは、今までよく述べられ、多くの博物館において学芸員の養成(資格を与えることではなく)がなされている。博物学時代においては、一人の研究者が植物学全般のみならず、生物学全域を研究分野にすることは珍しくなかったが、今日では植物学も高度に分化し、分類学においてさえ、高等植物のすべてに精通することは常識的には不可能となってしまった。このようなことから、博物館の学芸員が対象とする分野も、植物自然史部門においては限定されてくる。一学芸員が維管束植物を全て研究対象にすることは、もはや困難であろう。下等植物をも含めた植物全体について責任を負うことは一人の学芸員では不可能である。このことは教育の部分にも影響し、専門以外のものについての教育は、教科書

的にならざるをえない。しいては、学芸員の専門性を低くし、博物館の研究機能を失うことになる。学界では、一般的に維管束植物の研究がシダ植物と種子植物に研究者の専門がわかれていることから、日本における単独の自然史博物館でもシダ植物と種子植物にそれぞれ学芸員を配置しなければ、ハーバリウムの正常な機能は得られないと考えられる。

(2) 学芸員の学術指導

ハーバリウムの利用者は博物館展示を見学に来る利用者とは異なり、積極的に研究・調査をしてみようという人達であり、研究レベル、専門レベルの層の人達である芹沢(1976)。これらの利用者の数は少ないが、芹沢が述べているように、学芸員は利用者の行なう研究・調査が有意義な方向へ発展するように適切な示唆を与える責務を負うことになる。

教育は直接的な学術指導と、利用者が必要とする標本を収集・整理・保管しておく間接的指導とがある。

① 直接的学術指導とその周囲の問題

ハーバリウムの学芸員の利用者に対する直接的指導については、学芸員の専門的知識が要求されるが、博物館利用者の大多数が展示見学に集中しているために、これへの対応に追われてしまう。展示などの教育活動は博物館の華やかな部分であるが、専門的指導は市民大学としての博物館における学芸員の、はなやかではないけれども、重要な教育活動である。その活動としては、植物分類学、フロラ調査、植生調査などの方法、まとめ方の指導などがおこなわれる。指導にあたる学芸員は各々の分野に精通していなければならず、自身の研究・調査から得た知識が必要となってくる。学芸員の研究活動が他の教育活動などと同じレベルまたこれを優先して評価されることが必要と考えられる。しかしながら、目先の教育活動が重視され、研究活動が疎外されているのが実状である。その場しのぎの将来性のない活動といわざるをえない。ハーバリウムの予算と人員の貧弱さが学芸員の教育と研究活動を両立させない原因ではあるが、他にも要因はあるようだ。

それは、分類学に対する誤解である。分類学は大学ではすでに衰退しているから、今後は博物館ですべきであるという意見にも代表される。植物分類学は名前をつけるだけの学問であると考え、日本においては、すでに名前はほぼつけ終わったので、不用の学問になったと言う他の分野の研究者もいる。このような意見は若い学芸員の研究意欲をどれほどそこなうか計り知れないものがある。図-1は日本の分類学関係の論文がよく掲載され

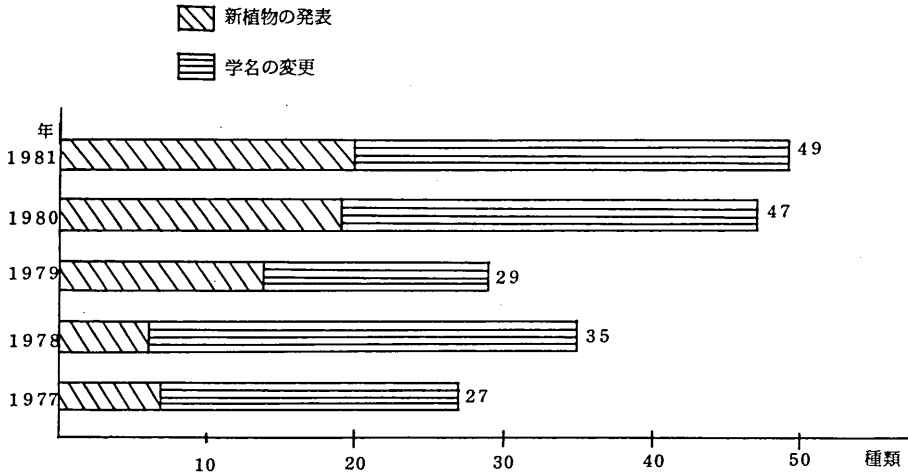


図-1. 日本産維管束植物の分類における基礎的研究の推移

ている植物分類・地理, 植物研究雑誌から1977年~1981年までの間の分類学における基礎的研究の推移を示したものである。この図からは分類学が現在も活発に研究されていること, そしてますます発展していることもうかがえる。他の分野の研究者からの分類学についての誤解は, 鑑別分類学に終始していた分類学者にも責任の一端はある。

植物の系統分類学はまだ途についたばかりであり, 大学のハーバリウムだけでおこなうのみでなく, 博物館ハーバリウムの学芸員も系統分類学的な研究活動を行い, 研究から得られた豊富な知識を教育へ転課するよう考えねばならない。

◎ 間接的指導と地域の標本

ハーバリウムが研究・調査のために標本を収集, 整理, 保管することは, 利用者の研究の発展に寄与することになり, 学芸員の行う間接的指導として重要であると考えられる。学芸員は膨大な時間と経費を収集, 整理に費いやすが, これはただ標本量を増加するのみであると理解されている。しかしながら, 利用者が多くの標本に直接触れることは, 多様な種についての認識を一層確実なものとしてゆく。

標本の収集, 整理は, 時として, 学芸員自身の研究を圧迫することもある。このことは, ハーバリウムを利用するアマチュア研究家の研究対象となる標本類が地域植物誌の基礎資料となる場合が多く, 学芸員の研究課題と

もなるために, 学術的にも有効な手段となるので標本の収集と整理はハーバリウムの将来の布石としなければならない。今日まで, いくつかの地域において分類に精通した学芸員が常在していなかったために, マニアによって採集された貴重な標本が散逸してしまっている。これらの標本が地域博物館に保存されていたら, 日本産維管束植物の分布様式の解明にどれほど寄与したか計り知れないものがある。この問題の解決には博物館ハーバリウムの整備が急務と考えられる。

(3) 学芸員の仕事量と博物館の設置者

標本の収集・保存についての遅れは, いくつかの原因が考えられるが, その代表的なものに学芸員の技術的・事務の仕事量に関するものがある。欧米の代表的な博物館におけるテクニカル・スタッフに相当する職種が日本には確立されていないために, 学芸員が技術的・事務の仕事の大部分を担うことになる。これらの仕事も重要な業務ではあるが, 学芸員の本来の業務とは考えられない。このような日本の事情は, 植物学の発展を博物館が支えてきたヨーロッパとの歴史の違いであるが今後検討を要する問題である。

学芸員が本来の業務に没頭できるようなハーバリウムは運営経費のうえから考えると, 県立クラス以上の単独の自然史博物館が望ましいといえる。県立クラス以下のスケールの博物館でテクニカル・スタッフの充実が困難であろう。しかし糸魚川(1980)は自然史博物館の地域

性ということから、県立クラスのスケールには自然発生のでないこと、地域に密接しにくいこと、行政指導型であることなどから、問題があるとしている。

4. まとめ

博物館のハーバリウムには分類学的研究をするに十分な標本量が収積されていない。今後社会奉仕を考えれば生態学的研究も充実させなければならない。しかし、その基盤として、分類学的研究が必要となってくる。分類学は系統分類学へと発展し、核形分析、発生様式、花粉形態などからの手法から研究されるようになり、各博物館に大規模なハーバリウムを必ずしも必要としなくなっている。地域の標本を主体としたハーバリウムにおいても、教育・研究活動は十分に可能であろう。

植物分類学も近年は高度に細分化され、一人の学芸員が維管束植物のすべてに精通することは不可能となりつつある。分類学の高度な細分化は、利用者の専門性を高めるために、研究活動から得られた学芸員の豊富な知識が要求される。学芸員の教育活動には学術分野の直接的指導と、必要な標本を集積することも教育活動と考え、間接的指導とし、分けて考えた。直接的指導については、多くの研究課題を残し、活発に研究されている植物分類学が対象となる。これに伴う地域の標本の集積が間接的

学芸員が、今まで述べたような本来的業務に没頭出来るようにするには、テクニカル・スタッフの充実が必要と考えられるが、このようなスケールをもつ博物館は県立クラス以上の単独の自然史博物館でなければ機能しないであろう。

最後に、本論文をまとめるに際し、有益なご指導をいただいた東京農業大学の吉村典夫、梅室英夫両氏に感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 小管貞夫：自然博物館の保存の在り方。博物館研究 43(1)：25～35(1970)。
- (2) 柴田敏隆他：自然史博物館の収集活動。(1973)。
- (3) 芹沢俊介：自然史系中小博物館における教育活動の構成。博物館学雑誌1(2)：1～10(1976)。
- (4) 金井弘夫：海外の標本室をみて(1)。日本植物分類学会会報3(5)：17～20(1976)。
- (5) 新井重三：地域における公立自然史博物館の建設と活動。博物館学雑誌3・4：1～6(1979)。
- (6) 糸魚川淳二：自然史博物館に期待するもの。博物館研究15(3)：3～6(1980)。
- (7) 上野輝弥：内側からみた欧米の自然史博物館。博物館研究17(2)：3～6(1982)。